



西田哲学会第十一回年次大会概要

西田哲学会十一回年次大会が平成二十五年七月二十日(土)、二十一日(日)の両日、立正大学において開催された。当日は最高気温が三〇度を下回る清々しい天候となつた。

二十日の午前中には、恒例となつてゐる外国语セッションが「京都学派学者たちと歩む新たなステップ」という表題の下

で行われた。同時に一般向に
行われていた『善の研究』勉強
会は水野友晴氏、石井砂母亜氏
が担当した。

午後の部では、嶺秀樹氏（関
西学院大学）「西田の場所の思
想における叡智的なるもの」と、
門脇佳吉氏（上智大学名誉教授）
「西田の場所はキリスト教哲学：
神学^{はたら}を変革する—場所だけが聖

「講演が行われた。嶺氏の講演は西洋哲学がプラトンのイデア論に代表される「叡智的なもの」に基盤づけられて、いる点に注目し、そうして「叡知的なもの」を通路として「絶対無の場所」を語ったと、いう観点から西田の絶対無の場所の思想を丁寧に検討したもので、西洋哲学の根本問題と西田哲学の中心的なアイデアに正面から向き合う講演となつた。」二般者の自覺的体系」の中で、「叡智的なもの」の位置づけを確認するところから検討が始

があるといえる。また、氏は事実と相即するという西田のイデア論の性格にも注目している。イデア的内容は一面に單なる直覺の内容つまり事実的内容であり、また一方で眞の自覚面の内容である、と考えられている。このように氏は行為的自己や事実性という観点を強調し、最後に西田の「叡智的なもの」を「個性的なるもの」、自由な個人の創造的な働きの内容と特徴づけた。

まり、そこで氏は西田が「叡智的一般者」から更に一般者の自覚的体系を掘り下げて行為的自己の立場を語つてることを強調する。叡智的自己の立場に立つうるのには原理的に行為的自己しかありえないのであり、行為的自己の「超越的ノエシス」の内容を自己自身の内に映したものがイデアであるとする点に西

や人間の創造について氏が強調するのは、それが「無からの創造」ではなく、聖靈による力オスからコスモスへ、塵から生きるものへの転換であるという点である。また洗礼は聖靈の音なき音を聞くことであるが、それは幼子となり、つまり自己を無にすることによって信徒自身の自分が聖靈の場所と一つとなることで可能になるという。御自身の洗礼体験などの実体験の報告を挟み、また時に演台から聴講者の方へ歩み寄りながら語りかける姿に多くの聴講者が力強く感じる。

的な神学が生まれなかつた。そこに西洋世界におけるキリスト教衰退の原因があるのでないかといふ。氏は禪の体験に基づいて場所論を解釈しつゝ、場所論がまさにこの聖靈の生きの問題を解明すると主張する。とり挙げられたのは創造における聖靈の生き、洗礼における聖靈の生き、そして人間の創造における

演がともに絶対無の場所における個性や創造という同じ論点に光を投げていたことは興味深い。

二十一日の午前には研究発表が行われ、石原悠子氏（京都大学）「西田幾多郎とエミール・ラスク」、玉田龍太朗氏（滝川第二高等学校）「現代」とは何か—三木清の「イヒテ批判」、八坂哲弘氏（京都大学）「西田幾多郎「場所」論における判断論について」の三つの発表が行われた。

音心根
いメッセージを受け取ったので
はないだろうか。

第十一号

発行・西田哲学会事務局

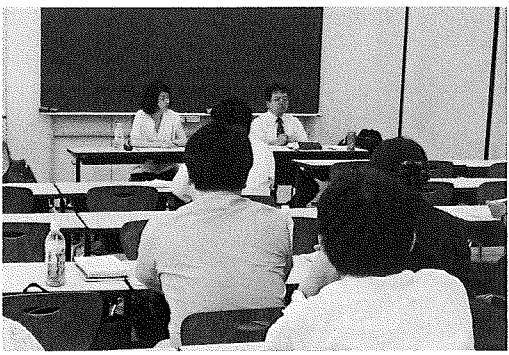
石川県かほく市内日角井一番地

石川県かほく市内日角井一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話(076)283-6600



(第十一号)平成25年11月30日発行

最後の新カント学派の一人として特徴づけ、その思想を場所期の西田がどうして、どのような意味で参考したのかを問題にした。氏によれば、西田にとってのラスクの思想の本質的意義はその客観主義的な思想にある。西田はラスクの客観主義にリツカートら新カント学派の立場の限界を乗り越える可能性を見ていた。しかし、西田にとってのラスクの意味はまさにこの新カント学派の乗り越えという局面に見られるのであって、「場所」の思想の形成そのものにおいて重要な契機を担っていたかとう点には疑問が残るとした。氏の発表はラスクの思想およびそれへ西田の言及を丁寧に整理し、西田にとつてのラスクの意義を厳密に測ろうとしたものと



玉田氏は「現代」をどのよう
に捉えるか、という観点から三
木清の思想を検討した。とりわけ
フイヒテが講義『現代の特徴』
の中で提示した現代觀を三木が
いくつかの著作、『ヘーゲルと
マルクス』、『現代思潮』、『危機
意識の哲学的解明』、『哲学的人
間学』の中で取り上げているこ
とに注目して、三木がフイヒテ

た。
（文責）中嶋優太

今回の大会のシンポジウムは、「技術」というテーマで行われた。三・一の東日本大震災に伴う原子力発電所の事故といった現在もなお続いている危機に関連して、西田哲学における技術の問題について考察していくという思いが背景にあつたのは確かなことである。

氏は三木とフイヒテはともに人間の内なる「惡」の自覺に焦点を置いて「現代」についての立論を行つたと主張している。三木のフイヒテ解釈の問題と、彼にとつての生々しい時代状況の問題という、ともに興味深い問題の絡み合つた報告であつた。

八坂氏はボサンケー判断論の受容という側面から西田の場所論理の形成を検討した。西田は判断論を通して「場所の論理」を形成したが、そこにボサンケーの判断論が影響を与えていたという。場所論の形成におけるボサンケーの影響については既に片柳氏が指摘しているが、八坂氏は更に「場所」期の講義ノートを参照し、そこで西田がボサンケーの「判断の真の主語」を「究極の超越的述語的なもの」としている点などに注目して、

いつた現在もなお続いている危機に関連して、西田哲学における技術の問題について考察していく。いこうという思いが背景にあつたのは確かなことである。

まず、秋富克哉氏（京都工芸繊維大学）が「純粹経験から行為的直観へ—技術が問われるところ」というタイトルで提題報告を行なった。秋富氏は、西田において「技術」が明確に主張化するのは一九三〇年代以降のことであることを十分に意識しながらも、「善の研究」という出発点の決定的であることを強調した。「技術の骨」とか「藝術の精神」といった表現のなかで語られていることへの注目である。こうした言葉で表現される事柄を通じて、制作実践の知識としての技術にとつては根本的な直覚が本質的であり、したがつる技術の問題について考察していく。いこうという思いが背景にあつたのは確かなことである。

て主客合一の最も深い実現が技術に見出せることを秋富氏は示した。技術とは主客合一的に物を作ることであり、それが眞の自己の実現であるという理解の萌芽を認めつつ、議論を「善の研究」以後につないだわけである。その上で、「行為的直観」や「ポイエーシス」そして「歴史的身体」という話題に触れ、「物を作ること」としての技術が歴史的世界の形成作用から見られるならば、技術の現時点でのあり方は機械的世界と意識の世界との対立的関係の深まりを現代人に突きつけているといふことが確認される。

も技術であり政治も技術であるという意味では西田が技術の政治性や時代性を認めながらも、その議論があまりに「樂觀」的であるからではないかと中岡氏は述べた。西田には△悪▽や△災▽を説明し、それなりの場所を与える論理がなさそうだということである。そして臨床哲学の実践から得たものとして、技術とは、世界の個物的多としての△技術者△が、（絶対他者でなく）その都度出会い、直面し、リスクペクトされるに至った他者から「要求」を突きつけられ、それに応ずべきか・応じられるのかを自問し、自分自身の能力や会話、手こねる、音オーバーなど、

ことが確認される。次に、中岡成文氏（大阪大学）が「生と思考のテクニ」¹といふタイトルで提題報告を行なつた。中岡氏はまず、「技術そのもの」と「技術の本質」とを区別するハイデガーの技術論との対比の下に、西田の技術論には「そうした区別がみられない」と、そしてそれが「物との対面的応接のレベル」に留まつていることを指摘する。そして西田の技術論が「基本的にボイエーション論」であるがために「二つのアクター間の平面的関係」の解説に留まり、「多様なアクター間の多重的（多位相的）絡み合いに迫れていない」とする。要するに、「近現代世界のシステム的多様性に西田は肉迫できていない」というわけである。そしてなつてしまふのは、思考

のかを自問し、自分自身の能力や余裕、手に入る素材や器具（西田のいう「作られたもの」の契機）と相談しつつ、そこでさまざまに工夫をこらす（「作る」こと、という定義を導いている。）はからい／＼としての技術である。「技術とは、工学的領域に、また政治や芸術の領域にも限られず、思考や生ること全体の具体的工夫に及ぶ」ことを明確に意識して、「地表を動き回る視点から」語られるべきだろうという提案に他ならない。

最後に、村田純一氏（立正大学）が「技術の創造性—西田幾多郎と技術の哲学」というタイトルで提題報告を行なつた。はじめに、「西田幾多郎は、技術を自らの哲学体系の中核に据えた、日本でのみならず世界的に見ても稀有な哲学者である」と



し、創造性に着目した技術観―技術哲学を持ち、人間が世界と関わりの論理を展開したこと。機械が技術的なでもなく、人間が技術的なでもなく、世界が技術的であるということを語るうとしたということである。技術の不可視性のゆえに、技術は哲学の基本問題と見なされることが少なかつたのが、なぜ見えなくなるのかと聞いて、それが「科学の応用」であり、目的への手段と考えられるからだろうと指摘する。身体や環境という主題も同じような位置にあるのだが、それゆえにこそ、西田が技術を取り上げているときに、身体・環境に触れて論じることは興味深いといふ。西田にそれができたのは、そのなかで経験しき生き

る場所という仕方で明確に世界をとらえたからであろうということだ。そうした理解の枠組の中で村田氏は、中岡氏とは対立する見解を探り、ハイデガーライの「技術に関する存在論的決定論」に陥らない概念枠組を西田が持っていたと指摘し、現代の技術哲学に大きな影響力をもつている「社会構成主義」の観点の存在論化としてそれを捉える。また、製作と使用とを共に視野に入れつつ創造性に注目することによりハイデガーの「製作一元論」への批判を形成すると解せる視点も西田にはあり、「社会構成主義への拡張」であり、「社会構成主義への拡張」への視点」をさぐることを可能にしているという。さらには、一九三〇年代に盛んだった技術の哲学が現代日本では無視され、休憩中に質問用紙を介して集められた質問やそれに対する応答による意見のやりとりは非常に活発であった。「近代技術の歴史性」は西田哲学の枠内とどのように説明されるのかといった議論、技術という概念で捉えられる事柄の範囲や「技能」との区別を明確にした方が良いのではないかという議論、機械による人間性喪失を克服するために技術成果の価値判断を実現させるのは意識我の世界で可能であ

るかという議論、そして西田の技術哲学が何故一九三〇年代の国家総力戦への動員へと進むことだ。そうした理解の枠組の中で村田氏は、中岡氏とは対立する見解を探り、ハイデガーライの「技術に関する存在論的決定論」に陥らない概念枠組を西田が持っていたと指摘し、現代の技術哲学に大きな影響力をもつている「社会構成主義」の観点の存在論化としてそれを捉える。また、製作と使用とを共に視野に入れつつ創造性に注目することによりハイデガーの「製作一元論」への批判を形成すると解せる視点も西田にはあり、「社会構成主義への拡張」への視点」をさぐることを可能にしているという。さらには、一九三〇年代に盛んだった技術の哲学が現代日本では無視され、休憩中に質問用紙を介して集められた質問やそれに対する応答による意見のやりとりは非常に活発であった。「近代技術の歴史性」は西田哲学の枠内とどのように説明されるのかといった議論、技術という概念で捉えられる事柄の範囲や「技能」との区別を明確にした方が良いのではないかという議論、機械による人間性喪失を克服するために技術成果の価値判断を実現させるのは意識我の世界で可能であ

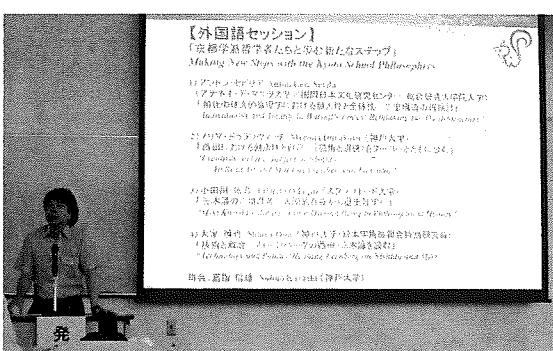
外国語セッション報告

京都学派学者たちと歩む新たなステップ

初日午前の「外国語セッション」は、「京都学派学者たちと歩む新たなステップ」と歩む新たなステップ」というタイトルのもとに開かれ、アントン・セビリア（アテネオ・デ・マニラ大学／国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学）、メリマ・ドウラコヴィッチ（神戸大学大学院）、小田桐拓志（スタンフォード大学）、大家慎也（神戸大学大学院・日本学術振興会特別研究員）の四

いずれにせよ、現在日本の危機的状況の中で、抽象的な科学技術信仰とでも言うべきものに安住せず、また人事物を作るVという歴史的かつ具体的な場面から遊離せずに、しかもそれを単に工学的な見地に留まることなく、どのように技術というものをへ思考や生きること、そして政治や芸術へにまで拡げて、思索を進めたらしいのかについてのヒントが多くちりばめられた有意義なシンポジウムであった。（文責 米山 優）

「初期西田における「自己」への発表



氏による報告及び質疑・応答が英語で行われた。司会は、小田桐氏とともにセッションの企画を携わった嘉指が務めさせていた。最初のセビリア氏による発表「和辻の体系的倫理学における個人性と全體性―二重構造の再検討」は、まず、和辻の主著「倫理学」における「人間存在の二重構造＝個人性と全體性」の捉え方が、それぞれ、戦前・戦中・戦後に書かれた上・中・下巻において、どのように異なるか確認した後、どうした変化の理由として、時代状況の違いに加え、和辻における西田とデュルケムの競争的影響を挙げた。「人間の学としての倫理学」において「私と汝」が引用されているように、和辻において西田哲学は概ね肯定的に取り扱われているが、詳しく見ると、西田とかなり違う志向が認められ、最も顕著なのは、他者関係においても「絶対の他」を主題化した西田に対し、和辻は文化的・社会的な一定の「間柄」における具体的な関係に焦点をあてたことがある。そして発表者は、このようない違った志向が認められ、最も顕著なのは、他者関係においても「絶対の他」を主題化した西田に対し、和辻は文化的・社会的な一定の「間柄」における具体的な関係に焦点をあてたことがある。そして発表者は、このようない違った志向が認められ、最も顕著なのは、他者関係においても「絶対の他」を主題化した西田に対し、和辻は文化的・社会的な一定の「間柄」における具体的な関係に焦点をあてたことがある。そして発表者は、このようない違った志向が認められ、最も顕著なのは、他者関係においても「絶対の他」を主題化した西田に対し、和辻は文化的・社会的な一定の「間柄」における具体的な関係に焦点をあてたことがある。

わけ、「主体」従属させられたもの」(フーコー)と「作られたもの」(西田)をめぐる両者のスタンスを比較することにより、「自己」の創造性」をめぐる両者の思索がどのような意義・射程を持つか明らかになる可能性が示唆された。

小田桐氏の発表「三木清の二項思考——人間的存在から歴史哲学へ」は、三木清が三十年代に展開した「日常性」に関する思考を、最終的には、福島後の世界状況を踏まえた今日的な視点から考察することを動機としている。まず、ユクスキュルの環世界(Umwelt)論や最近の動物行動学の知見に基づきつつ、世界的環世界を構成する重要な要素であり、ひいては、人間性の部分的定義とさえなるものだと強調した上で、三木の歴史哲学は、そのような「日常性」の基本性格を明らかにした先駆的思索であったと評価する——とりわけ、三木における「現在」と「現代」の二項性に関する考察は人間の時間体験における「日常性」がもつ二重の性格を明示している、と。また、三木の歴史哲学は、その形而上学的な思考の基礎を「場所の論理」に置いており、西田と三木における事実('Tatsache')に関する考察を参考しつつ、両者の歴史哲学及び後期西田の人間的存在についての論考を整理することに

は、思想史的研究に留まらない、大きな現代的・実践的意義があるだろうと論じた。

大家氏の発表「技術と政治—フィーンバーグの西田・三木論を読む」は、哲学における技術論的展開を牽引してきたA・フィーンバーグの論考を参考にしつつ、西田と三木における技術をめぐる思索の現代的意義を批判的に明らかにすることを目指す。フィーンバーグは、西田・三木両者の技術論は、時代的制約限界にもかかわらず、グローバル化した世界における技術・政治複合体を批判的に捉える可能性を持つていると評価しているが、発表者は、こうした可能性を具体化するためには、西田・三木における主体と客体の概念そのものを技術の場面から問いかねばならないだろうと指摘した。こうした認識を踏まえ、結論では、西田と三木の技術論を、技術の物質性と技術・政治における「排除と包摂」の現実を見据えた技術・政治学としての技術哲学へと発展させる可能

性が提示された。

質疑応答は、各発表の後と、発表が全て終わった後に行われたが、四〇名程のフロアーから、各発表における中心的概念の理

解、あるいは時代状況との関連などに関する様々な質問が寄せられ、活発な意見のやりとりが行われた。発表者が四名となつたため、事務局のご配慮により、例年より三〇分早めて一〇時からセッションを開始させていた。だいたにも拘らず、最後の全体会での質疑・応答に十分時間を費やすことができなかつたのは残念であるが、社会的・技術的・政治的諸条件と「主体」あるいは「日常性」との関係をめぐる問い合わせ、共通する主題として期せずして浮かび上がつてきた興味深いセッションであつたと思う。

エッセイ

大島博香

に満足していよう。そのような折、大橋先生から、安藤忠雄氏のデザインで新たに西田幾多郎記念哲学館を建設中というお話を伺つた。開館に当たり、義父が大事に保存していた西田先生の自筆の書を展示品としてお貸しすることになった。そのようないくつかの出来事が、私が西田哲学を勉強するきっかけになつた。

京都哲学撰書の再版の件で燈影舎の方がお見えになつたとき、京都学派の先生方の様々なエピソードを伺つた。我が家の一書斎には、古い木机がある。義父が毎日着物姿でその机に向まつて、原稿を執筆していた姿を思い出すが、それが実は田辺元先生からお譲りいたただいた机であつたことをそのとき初めて知つた。これは大変と、半ば書物置き場と化していたその机をきれいに拭いて、元の仕事場どおりに戻して今に至つている。

ンタードで田中久文先生の講座を拝聴し、哲学と触れ合っている。義父大島康正が存命であればさぞかし喜んだことであろう。初めに、「ここに至るいきさつを述べておきたい。

十年以上前、大橋良介先生から、「日本海軍と京都学派の先生方との秘密会合の記録がご自宅のどこにあるはずだから探しして欲しい」との依頼を受けた。家中をくまなく探した結果、書斎の奥の引き出しの中、重なる原稿用紙の束の一番下に、当時のまま、古びた茶封筒に入れられて発見された。この記録を、大橋先生は著書で「大島メモ」として紹介してくださったので、今年一月にNHKで放映された番組「日本人は何を考えてきたのか—西田幾多郎と京都学派」の取材でもお役に立つことができた。戦争当時、義父はこのようなメモを手元に保持する危険に随分と神経を使つたことであろうが、当時の実情を語る貴重な資料として蘇つたこと

さて、そんな素人の私には哲学に関するエッセイなど逆立ちしても書けるはずはない。そこで視点を変え、書家の立場として感じたことを述べたいと思ふ。

(5) 西田哲学会会報 平成25年11月30日発行(第十一号)
かりにくい書物だ。言い回しが
くどく、あえて難しい言葉を使
い、難しい文章に仕立てている
ようを感じてならない。根源的
な概念を矛盾なく論理的に組み
立てていくためには必然的にそ
うなるのだろうが、「善の研究」
も何度も繰り返し受けた講座
で、ようやく理解の一端にたど
り着いた程度だ。
しかし短歌は別である。短歌
は心で感じ取ることができる。
私は短歌を通して、西田先生に
近づいてみようと思った。
二十代の初めから万葉集に詠
われた心に興味を持つて勉強
し、また自身の書の作品に残し
てきたので、歌にはとても親し
みがある。西田先生の歌集『西
田幾多郎の歌』(西田幾多郎博
士頌徳会編)には、西田先生の
人生の縮図、ひとりの人間とし
ての西田先生を感じ、それが心
に直に響いて、涙無くしては読
めなかつた。幾度となく家族や
友人との死別に向き合い、哀し
みの日々の中で思索を続け、日
本の哲学を確立されたことに深
い感銘を受ける。岩波書店の『西
田幾多郎全集』から転載された
「短歌について」という文章が
『西田幾多郎の歌』の巻末に載っ
ている。ここで語られている万
葉集に対する先生のお考えは、
私が以前から心に温めてきたと
おりの内容で、例えようのない
うれしさを感じた。「我々の生
命と考えられるものは深い噴火

この底から吹き出される大いなる命の焰といふ如きものでなければならぬ。詩とか歌とかいふものはかかる生命の表現といふことができる、かかる焰の光といふことである。心強いお言葉である。

私は短歌によつては極めて内面的なものが言ひ表されると思ふ。短歌は情緒の律動を現すものとして、勝義に於いて抒情的といふべきであらう。西田先生はこうも述べられてゐる。

このことは書の作品作りにおいても見事に当てはまる。「短歌」を「書」に置き換えれば、まさにその通りと思う。私が尊敬してやまない書人、鈴木翠軒先生（明治二十二年～昭和五十一年）は、日本の抒情豊かな独自の書風を確立した昭和の大書家である。私は翠軒先生の孫弟子にある。翠軒先生はその生涯に代表作である「万葉一千首」を完成させ、現在は芸術院に保管されている。数年前、一千首のすべてが芸術院において公開され、初めてその全体像を見ることができた。翠軒先生の万葉解釈は西田先生のそれと驚くほどに一致して、私はこの上ない感動を覚えた。

ここで、西田先生の歌を三首取り上げてみる。

「人は人吾は吾なりとにかく
に吾が行く道を吾はゆくなり」
「あさに思ひ夕に思ひ夜にお
もふ思ひに思ふ我が心かな」
「月かけのまだ消え失せぬ山
のはに名も知らぬ星一つかがや
く」

「月かけの…」はすでに西田
幾多郎の歌として、十年ほど前
に書かせて頂いたことがある。
美しい情景が目の前に浮かぶ。
星の輝き、空の響きに魅せられ、
創作意欲を誘われた。

西田先生の短歌からは哲学者
としての姿のみならず、人間そ
のものを感じる。さらに、先生
ご自身の「書」もまた等身大の
人間を感じさせる、すばらしい
書である。迷いのない線と強い
筆致は、精神の強さを体現する。
自由奔放なフォルムは良寛の書
風を思わせる。横線から縦線に
続く特徴ある丸い曲がり、文字
の最後の横一線は見事な線でと
ても真似できるものではない。
私はそのひとつ線に込めた氣
持ちを大いに感じる。書のみで
なく、手紙や原稿の筆跡にも先
生の人柄が偲ばれて、実際に面白
い。現在のように携帯電話やパ
ソコンのない時代、ハガキでの
やり取りや原稿はすべて手書き
だ。これらの貴重な自筆文書を
見る度に「書は人なり」とつく
づく思う。現在、西田哲学会に
おられる諸先生方の手書きの原
稿が残せないのはとても残念な
ことである。

ここで田辺元先生のことにも少しふれておきたい。田辺先生の人間像に近づくことができたのも歌をとおしてであった。先生も病弱な奥様に先立たれ、家庭的にはあまり恵まれなかつたようだ。奥様亡き後に詠まれた短歌には、魂の叫びが聞こえてくる。先生のお心そのものである。二年前の夏、北軽井沢の閑かな林間に残る田辺先生の山荘を訪れた。窓越しに中をのぞき、ここで厳しい冬の間もずっとお暮らしであつたのかと思ひをめぐらせた。終戦とほぼ同時に北軽井沢に移り住み、最後まで自己に厳しい思索研究生活を貫かれた厳格な哲学者の姿に感慨ひとしおであつた。田辺先生が残された数多くのペンの筆跡からも、実に強い意志を感じ取ることができる。

意を自分なりに表現したつもりだ。書の道を一人で進むのは大変だが、喜びも大きいと思うし、そうなるようにしたい。当時、独立を考え始めてから既に数年が過ぎていたが、西田哲学会に入会したことで予期せぬ大きな力を授かり、決心できたのである。

